

地方に高等教育機関があることの意義

本年度の秋季企画展は講堂改修竣工を記念して、経済学部の前身である彦根高等商業学校を取りあげます。設置が決まった当時、財政的な問題を抱えながらも、政府は高校や高等商業学校などの高等教育機関をできるだけ全国に広げようとする政策をとっていました。そのなかで一九二二年の勅令で正式に彦根に高等商業学校が設置されることになりました。とはいえ、こうしてつくられた高等教育機関は、地域のもではありませんでした。まず地域の若者たちのために設けられた教育の場ではありませんでした。そもそも高等商業学校の入学者は、男子しか想定されていません。また現在の滋賀大学と同じように、地元枠はなく、広く全国から受験し合格したもののみが入学していました。地域の経済に貢献するというメリットはあったでしょうが、多くの若者が集まり来るとは、地域に高等教育機関があることのメリットはなんだったのでしょうか。まずひとつは、それがあつたことそのものにあつたと思います。地域に高等教育機関がなければ、高等教育を目指そうとする若者や子どもに受けさせようという大人たちも出てきにくかつたでしょう。また、高等教育機関が全国に拡充されつつあつたといえ、どの町にもあるものではありません。それがあつたといふことは地域の人々になら

かの優越感を与えるものだったでしょう。官立学校は内に閉じたものではありませんが、少なくとも外から眺めることはできません。講堂や校舎など地域の人々には馴染みの風景となつたでしょう。そして、数少ない機会とはいえ、なんらかのイベントを通じてキャンパス内に足を踏み入れることもできました。そこにある、目にすることができるといふことは大事なことだつたと思います。

また教官として生徒として、新たにヒトが到来するといふことは、なんらかの未見のモノやコトをもたらします。たとえば、多くの知を蓄えてきた教官というヒトはそれらを体現する存在だつたでしょう。さらに高商では生徒が中心となつて、講演会、映画会、音楽会などの催事、スポーツのイベントを行いました。それによつて、地域の人々が目にしたことのないモノやコトがもたらされたでしょう。そして未知のモノやコトのなかには、地域のモノやコトを発信したり、保存したりすることを可能にする手立てもありました。

地方の高等教育機関の施設である史料館が保管、所蔵する史料群はまさに、これまで保存されてきた地域のモノであり、コトの記録です。そうしたモノを使つて史料館がおこなつていく発信のひとつが展示です。ひとりでも多くの方々の目に触れるものになることをわれわれは望んでいます。

(史料館長 坂野鉄也)

令和二年度企画展示



滋賀大学講堂改修竣工記念

地域とともに歩む彦根高等商業学校

一〇月一九日(月) ～ 十一月二〇日(金) 九時三〇分～一六時三〇分

土・日・祝日休館

関連講演会(オンデマンド型講演)

「高等教育の拡充と都市の再編―高商の建築遺産―」

鹿兒島大学大学院理工学研究科建築学専攻教授 木方十根氏